

都市における地域学としての池袋学の成果と課題 ——インタビューと講演録から——

Identifying Problems and Issues of Ikebukuro-Gaku: Based on an Interview and the Ikebukuro-Gaku Lectures

佐藤 裕亮, 関 駿平, 鍋倉 咲希, 有田 将也, 庄子 諒
SATO Yusuke/ SEKI Shumpei/ NABEKURA Saki/ ARITA Shoya/ SHOJI Ryo

From the latter half of the 1980s, regional studies, which seek to elucidate and solve problems of local communities, are spreading all over Japan, and in recent years there are also regional studies in urban areas organized by universities. However, urban and regional studies have new specific problems not found in conventional regional studies. In this paper we clarify the structural problems that urban and regional studies have, targeting regional studies in a city held in Tokyo called "Ikebukuro-Gaku" led by Rikkyo University, in cooperation with Tokyo Metropolitan Theatre.

キーワード: 地域学 (Regional Studies)、都市における地域学 (Urban and Regional Studies)、池袋学 (Ikebukuro-Gaku)

1. 問いの所在

(1) 池袋学の萌芽⁽¹⁾

本稿の目的は、立教大学と東京芸術劇場による地域連携講座「池袋学」を対象として、「都市における地域学」の抱える構造的な課題を明らかにすることにある。

池袋学の始まりは2011年7月、立教大学池袋キャンパス内で「グローバル演劇都市池袋!」というトークショーが行われたことに端を発する。このトークショーに聴衆として参加していた演劇研究者の後藤隆基（当時・立教大学大学院文学研究科在籍）は、池袋において立教大学が「芸術・文化を通じた地域連携」（後藤 2016: 20）にどのような貢献ができるのか、疑問に思った。後藤が質疑応答でこの旨を問いかけると、東京芸術劇場副館長の高萩宏から、その年の6月に立教大学と東京芸術劇場との間で連携協定を結んだことが明かされた。

しかし後藤が大学当局にこの協定について問い合わせたところ、具体的な中身は未定だった。この「連携協定に関して、そもそも、かつ最大の課題」（後藤 2016: 20）を知った後藤は、当時自身が勤務していたESD研究センター長の阿部治教授と協力し、「持続可能性」という観点から「地域との連携をめざす大学と、地域文化を発信する公共劇場との結節点を探るべく」（後藤 2016: 20）働きかけていく。同年末、連携協定締結記念シンポジウムが開催され、引き続き定期的な講演会やシンポジウムを開催していくことが取り決められた。

この動きが地域連携講座「池袋学」に結実する。詳しくは後述するが、「多様なテーマと講師によって池袋の過去・現在・未来を語ることをめざし、広く一般に参加者を募った」（後藤

2016: 26)。池袋学は、2014年から4年間にわたって公開講座が行われ、地域に根ざす公共劇場と大学が主体となった地域学の取り組みとして展開されることになっていく。

(2) 先行研究——地域学の概観と池袋学の位置づけ

近年、地域学と呼ばれる試みが広がりを見せている。地域学という学問領域に決まった定義があるわけではないが、ここでは「一つの地域という共通項を媒介に、地域社会、経済、歴史、環境、人々の暮らしや生活体験をまとめて研究し、自然と産業と暮らしの関係が総合的に解明され、当面する問題をトータルに究明していこうとするもの」(西村・山田・吉居 2014: 24) という包括的な定義を参照しておきたい。『地域学入門』の序章において柳原は、その特徴を「ひとりひとりの思い(意思・欲求・願望)と生活とを重視して『現在の地域』に内在する諸問題を探り出し、その解決を図ること」、「『望まれる地域』の実現に寄与することにある」としている(柳原 2011a: 4)。つまり、地域が抱える問題の解決を目指した、とくに人びとの生活に着目する学際的・総合的な視点をもった実践的な学問である点が、地域学の特徴だといえよう。

重要なのは、地域学においては地元住民の自発的な参与と「学び」が期待されることが多い点だ。地域学に携わる研究者によれば、「地域学」や「地元学」と自称する営みは1980年代後半から日本各地で登場したが、その背景には、バブル景気に伴う地域開発の結果、地域の豊かさや誇りを失った地域住民の悲哀、グローバル化の進展、過疎化や少子高齢化などの社会問題がある。地域学は、住民からの異議申し立てでもある。したがって、地域学において住民による自発的な学びは不可欠であり、「学びの主体」としての住民が主役となって「地域づくり」をしていくことが目指される(廣瀬 2008; 柳原 2011b)。そのことは、地域学において、その地域に対する「当事者性」(家中 2011)を重視する指摘とも重なる点であろう。

なお、近年日本国内において大学が関与するかたちで地域学が隆盛を見せている背景には、教育と研究に加えて「大学における『第三の活動』としての社会貢献、地域貢献活動を意識せねばならなくなっている」(岡田 2007: 242)現状があることを付言しておこう。池袋学もまた、こうした社会背景のもとで行われたものである。

だが、池袋学が他の地域学の中で独特なのは、「都市における地域学」であることだ。都市における地域学は「渋谷学」(國學院大学が2002年度から行っている地域連携の取り組みの1つ)や「新宿学」(早稲田大学が2004年度から行っている公開講座)などの先行事例がある。これらの試みは、大学が主催する地域学である点、フィールドが都市であることを自覚している点、地元の人びとに向けた公開講座なども行っている点で、池袋学と同様の取り組みである。

しかし、都市における地域学は、従来の地域学と同じような取り組みなのであろうか。言い換えれば、都市における地域学には従来の地域学にはない、独特の課題があるのではないか。論旨を先取りするならば、池袋学は池袋という都市における地域学であること意識しながら展開された。その点で、都市における地域学が抱えることになった独特の課題に直面することになったように思われる。次章以降、池袋学の3年間の変遷を見ることを通して、「都市における地域学」が抱える課題について考察を試みる。

2. 池袋学の特徴とその変遷——インタビューと講演録から

(1) 池袋学とは何か——テーマの内容と選定の背景

本章では、講演内容やレポート、関連するエッセイなどがまとめられた『「池袋学」講演録』の記述、および池袋学の運営において中心的な役割を担った、現・立教大学兼任講師の後藤隆基氏に対して筆者らが実施したインタビュー調査をデータとして、池袋学の特徴とその変遷、成果と課題、そして今後の展望について、分析を行っていききたい。

2011年度に引き続いて開催された2012年度のシンポジウムのなかで、登壇した阿部治から「池袋学」の構想が提案される。そして、2013年度を準備期間として、翌2014年度から2016年度までの3年間にわたって「池袋学」が開講されることになる。

定住者と流動者が入り混じる都市である池袋において地域学を試みるにあたって、具体的に対象をどこに想定するかという問題は、構想段階からおおきな検討課題となっていた。そのなかで、「まずは池袋の歴史や文化的事象の発掘と再考を図りながら——郷土史的な歴史探訪のみを目的化するのではなく——現在の地域的課題の発見と解決に資するテーマも併せて選定し、未来志向のビジョンを明確化する方向性」（後藤 2016: 24）が議論された。その結果、東京芸術劇場が春季3回、立教大学が秋季3回の講座を担当し、それぞれのリソースを活用した講座を企画・運営するとともに、場合に応じて夏季・冬季に特別講座を実施することが定められた。後藤の記録によると、2014年度は特別講座を含む全8回の講座に684名が、2015年度は全7回の講座に545名が訪れたという（後藤 2016: 27）。

東京芸術劇場は、池袋の文化的土壌を築いたものとして、1930年代に見られた芸術家集団の沙龙的空間を指す「池袋モンパルナス」、戦後に著名となる漫画家たちが住んだアパートである「トキワ荘」、西武池袋本店内にあったセゾン美術館に代表される「セゾン文化」を、3年間の共通テーマに設定した（後藤 2016: 25-6）。この三本柱は、全22回の池袋学の講座全体を特徴づける主要な軸になった。この選定理由については、東京芸術劇場が池袋学の実施にあたって文化庁の「劇場・音楽堂等活性化事業」の助成を受けていたため、いわゆる「アート」に関連するテーマを設定する必要があったことが、後藤へのインタビューから明らかになった。

他方、立教大学にはそうしたテーマ設定における制約はなかったため、「大学所属の教員が、多様な専門領域から『池袋』を見すえ、歴史・地域文化の再考や現代的課題の考察を通して未来を志向する企画」（後藤 2016: 26）が組み入れ、文学、観光学、歴史学、都市研究、ジェンダー研究、演劇研究など、各講座においてそれぞれの講演者の立場からテーマが選定されている。東京芸術劇場が担当した春季が継続性をもった3つのテーマで貫かれているのに対して、立教大学が担当した秋季ではテーマのバラエティに富んでいる点が特徴だといえるだろう。

しかし、こうした講座の形式や、テーマ選定に関する連携主体間での差異は一貫して継続されたものの、後藤へのインタビューによれば、池袋学には3年間の展開のなかで、ある大きな転換があったという。それは、座長の交代を契機として生じた。次節からその点を確認しよう。

(2) 「都市」における地域学として——第一期の池袋学

池袋学の初代座長に就任した立教大学名誉教授の渡辺憲司は、『「池袋学」2014年度講演録』の巻頭言である「池袋学事始」のなかで、「池袋学は、もとよりここに住んでいる人や生まれた人のみを対象にしているものではない。つまり郷土史という言い方は相応しくない。池袋を通

過する人でもいい。池袋への旅人でもいい。池袋を愛する人のための学である。歴史学というよりも、現代に住む人からの視線を第一に考える視点を持ち続けたいと思う。現代の雑多性こそ、池袋を支えるカルチャーである」（渡辺 2015: 5）と述べ、「池袋学」の外延を定める。つまり、池袋学は、池袋に暮らす人びとのみを対象とした「郷土史」でも、中央に対応するようなニュアンスを含む旧来の「地方史」でもなく、「池袋を愛する人」「現代に住む人」の視点から池袋の「文化」や「歴史」を語ることで「池袋の個性」を明らかにすることを目的とした「現代史」ないしは「地域史」とされている（渡辺 2015, 2016）。『「池袋学」2015 年度講演録』の巻頭言で渡辺は、総合的に地域を対象とする学問としての地域学の意義を指摘し、「池袋学は、地域学である」（渡辺 2016: 5）という一文に、以上の含意を集約させる。

だが同時に、渡辺は「私にとっては、こんな学問領域論など、妙に白々しいような気がしてならないのも確かである」（渡辺 2016: 5）とも述べ、「知らない者同士が、何かを知ろうとして集まる。池袋で邂逅する。『学』とは知ることが原点である」（渡辺 2016: 5）として、その懐の深さを強調している。この点は、池袋に「住む人、働く人、学ぶ人、遊ぶ人、みんなが参加できる」（後藤 2016: 25）という池袋学のキャッチコピーにも表れているといえる。

池袋学の「懐の深さ」は、渡辺が述べる池袋の「雑多性」と関連がある。渡辺は、池袋学をとおして、「何処にでもある都会の光景の中に、何処にでもあるような大切なものを見出していきたい」とする。この心情は、「故郷と呼んでいいような心情」、「地方史と呼んでいいような庶民的批判精神」とともに、「総括的な懐の深さを示す地域学」（渡辺 2016: 5）が包含するものとされている。この多義性は、池袋学が、前節で示した三本柱をはじめ、多種多様な文化現象を取り上げた点にも象徴されている。つまり、渡辺の念頭において池袋学は「都市」を対象とした地域学なのである。池袋が人の移動を中心とした「都市」であり、池袋学が「都市における地域学」であることは、後藤も強調している（後藤 2016: 30-1）。

要するに、「もとよりここに住んでいる人や生まれた人のみを対象にしているものではない」という文言に象徴されるように、渡辺を座長とした第一期の池袋学は、池袋という場を多様な人びとが集い、多面的な様相をもつ「都市」として意識していたことが指摘できる。

（3）地元住民中心の地域学への志向——第二期の池袋学

しかしその後、学内の専任教員が座長になるべきとの判断から、2016 年度に座長が渡辺から阿部治に代わると、池袋学の営みに、反省的な視点が加えられる。『「池袋学」2016 年度講演録』の巻頭言で阿部は、それまでの池袋学に一定の評価を与えながらも、「本来『地域学』としての意図をもってスタートしたものの、地域自体からのボトムアップの視点が、いささか不足していたように思える」（阿部 2017: 4）と振り返り、「もしも今後の展開を考えるとしたら、やはり『地域学』として池袋学をつくっていくための視点を、もう一回整理することが必要だろう」（阿部 2017: 4）と述べる。その原因を、阿部は「池袋というものを『地域』よりも、様々な『トピック』として捉えてきたためかもしれない」（阿部 2017: 4）と述べている。

この反省は、池袋学の転換点として、扱われる内容にも反映された。特筆すべきものに、雑司が谷のまちづくりをテーマに選定した2016年度の2回の夏季特別講座がある。阿部への座長の交代にともなう「地域自体からのボトムアップの視点」への転換に沿うかたちで、地元住民が主体となったまちづくりの取り組みが実践されている雑司が谷が取り上げられたわけだが、「地域との一体的な『池袋学』の実践」（後藤 2016: 28）が新たに試みられたものだといえる。

後藤によると、いくつかの講座のなかでは、扱った具体的な文化事象の内容と、池袋という場所との関連をめぐる質疑応答が見られたようだ。その印象を振り返りながら、後藤はインタビューのなかで、「池袋学に足りなかったもの」について次のように語っている。

なんでしょうね、結局池袋ってなんだったのかな、ってのはわかんないですね。だから、その、モンパルナスにしてもトキワ荘にしてもセゾンにしても、それぞれの文化現象としてはそれぞれの専門家を呼んで話してもらってるんですけど、それがなんで池袋だったのか、ってのまでは深められなかった、ってのはありますね。……じゃあ池袋っていう地域はなんなの、っていうことが、結局どのテーマをやってもなんとなく表面的に終わっちゃった、っていう。

以上の率直な発言ののち、2016年度で一度区切りを迎えた池袋学の今後の展開として、後藤は「もうちょっと地域寄りになると思います」と述べ、NPO法人ゼファー池袋まちづくりの主催のもと「もうちょっとこぢんまりとした地元の人向け」の、「講座っていうよりは勉強会クラス」の活動に取りかかりはじめている、と述べた。この移行は地域に根差した地域学としての池袋学を今後つくっていくための方策として、地元住民との協働を強く意図した取り組みへの志向だといえる。しかし、その前向きな気持ちと「池袋が何なのかわからなかった」という言葉とのギャップは大きい。池袋学に中心的に携わった結果述懐された後藤の感慨は、池袋学が抱えることになった、独特の困難を示しているのではないか。最後に考察しよう。

3. 結びにかえて——都市における地域学の課題

前章では、池袋学の構想とその変遷について論じた。とくに、地元住民を重視する方向性へと舵が切られた点は、地域学としての池袋学にとって重要な転換であった。しかし、後藤が実感した「池袋が何なのかわからなかった」という池袋学の困難は、阿部・後藤両氏が志向する地元住民との協働という方針転換で解消されるものではないように思われる。おそらく、都市における地域学である池袋学には、属人的な範囲を超えた、固有の困難があるのだ。最後に、公共劇場と大学の連携である池袋学の抱えた構造的な課題と、「都市における地域学」の「都市」という問題について、問題提起を行いたい。

まず、「地域自体からのボトムアップの視点」が不足した構造的な要因として、東京芸術劇場と立教大学という連携主体間のズレが指摘できる。東京芸術劇場は助成金の関係上「アート」に関連するテーマを設定する必要があった。しかし、「池袋モンパルナス」(芸術家集団)、「トキワ荘」(漫画家集団)、「セゾン文化」(消費文化)の担い手たちの多くは、池袋の「地元住民」ではない。ここに見られるのは、東京芸術劇場が取り上げた地域文化(=「アート」と、立教大学が対象とする地域文化とのズレである。地域学を協働する主体間において、地域文化およびその地域文化の担い手のイメージがズレているとき、その「地域」のアイデンティティは拡散せざるをえない。後藤の述懐はその結果であるといえるだろう。今後、テーマ選定の背景についての追加調査を行うことで、このズレが生じた原因を探求することが目指される。

しかし、連携主体間のズレが生じたのは、池袋学という地域学がフィールドとした「都市」という場の特性にも原因があるのではないだろうか。都市において人びとは短期的にも長期的

にも流入・流出を繰り返す。そのような状況下において、地域学の「主体」となるべき人びとは誰なのか。言い換えれば、「都市の当事者」とは誰なのか。そのとき——渡辺が指摘していたように——、昔から池袋に「住んでいる人や生まれた人のみ」ならず、「住む人、働く人、学ぶ人、遊ぶ人」を含む、さまざまな人びとが集う「都市の多様性」を捉え、「学び」へとフィールドバックする方法論的な視座もまた要請されるだろう。

たとえば、かつて奥田道大が行った池袋でのフィールドワークによるアジア系外国人の実態調査とその振り返り（奥田 2004）が示しているように、外国人もまた池袋という「都市の当事者」なのではないか。彼らを主体として「〈池袋〉の自画像」（奥田 2004: 111）を描くことも、池袋という都市の地域学として可能であろう。したがって、都市における地域学には、多様な「都市の当事者」の存在をすくい上げる、現場に根差した調査研究が求められる。筆者たちによる別稿のフィールドノートは、その実践の第一歩としての意味もある。

大学の地域連携として地域学は今後も隆盛を見せていくであろう。しかし、都市における地域学には、従来の地域学にはない、地域学を協働する主体間の「地域文化」イメージのズレや、「都市の当事者」とは誰を指すのか、という新たな困難があることを考慮に入れる必要がある。

註

- (1) 本章の記述は、2018年10月23日、立教大学池袋キャンパス内において、後藤隆基氏に対して筆者らが実施したインタビュー調査での語りを参考に再構成したものである。また、以下の本文中における後藤氏へのインタビュー調査に関する引用や言及も、すべて同日のインタビュー調査に基づくものである。

参考文献

- 阿部治, 2017, 「地域に根ざした池袋学の構築へ」『「池袋学」2016年度講演録』4-5.
後藤隆基, 2016, 「都市における地域学としての『池袋学』の可能性(1)——立教大学と東京芸術劇場による地域連携の実践」『大衆文化』15: 17-34.
廣瀬隆人, 2008, 「ローカルな地としての地域学」日本社会教育学会編『日本の社会教育』52: 39-49.
西村千尋・山田千香子・吉居秀樹, 2014, 「『地域学』の内容とその学びに関する一考察」『長崎県立大学経済学部論集』48(1): 23-31.
岡田浩樹, 2007, 「人類学” at home town”」『文化人類学』72(2):241-268.
奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場——越境するエスニシティと21世紀都市社会学』東京大学出版会.
渡辺憲司, 2015, 「池袋学事始」『「池袋学」2014年度講演録』4-5.
———, 2016, 「池袋を知るために」『「池袋学」2015年度講演録』4-5.
柳原邦光, 2011a, 「地域を生きるために」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門——〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房, 1-10.
———, 2011b, 「いまなぜ地域を考えるのか」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門——〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房, 12-27.
家中茂, 2011, 「生活のなかから生まれる学問——地域学への潮流」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門——〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房, 73-100.